ドラマ女性学

〈言葉より行動を ～女性運動の原点〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

英原題の〝サフラジェット〟は、今から百年も前にイギリスで参政権を求める女性活動家を指す蔑称だった。女性たちは苦しい抵抗運動の中から自ら学び、目覚め、自身のもつ力と連帯の喜びを知る。〝サフラジェット〟という言葉は、やがて社会を変えてゆく活動そのものを指す言葉となった―。

この映画は、女性運動の原点ともいえる当時の女性たちの姿を実話に基づいて描き、運動を通して自己解放する様子がリアルに現代の私たちにも迫る。

舞台は一九一二年のロンドン。劣悪な労働環境の洗濯工場で働くモードは、同じ工場で働くやさしい夫と可愛い一人息子との三人暮らし。ある日、偶然通りかかった街の商店の窓ガラスが投石で壊されるのを目撃する。それは女性参政権運動団体WSPU（女性社会政治同盟）の〝行動〟の現場で、モードには初めてのサフラジェットとの出合いだった。やがてモードは工場の同僚のつてで薬剤師イーディスを知る。九回も逮捕歴のある筋金入りで、夫の協力のもと自分らの薬局を秘密の集会所にしていた。頭脳明晰でものに動じず、警察の暴力から身を守るための柔術をサフラジェットらに教えていたこの反体制運動の闘士役を、当時女性らを抑圧していた英国首相（ハーバート・ヘンリー・アスキス伯爵）の曾孫であるヘレナ・ボナム＝カーターが堂々と魅力的に演じているのは歴史の皮肉か。

七歳から働き始め、十二歳で正社員、現在二四歳のモードは、仲間と集会に出たり、身の上を話し合ったりするうちに、なぜ同じ工場で働いても夫と賃金、労働時間にこんなに差があるのか。働いても働いても楽にならないこの生活。もっと他の生き方があるのではないかしら…と次々に疑問が湧いてくる。同じ思いの仲間との絆も深まってゆく。

そんな彼女を励ましたのは、初めて集会で聞いたWSPUのカリスマ的リーダーであるエメリン・パンクハーストの演説だった。「将来生まれる女の子たちが、自分の兄や弟たちと同じ機会をもてる時代のために闘うのです」と。闘いは今だけのためではない。五〇年後百年後の女性たちのためにも頑張ろう、と奮い立つモード。だが、警察は史上初めてカメラによる市民監視システムを導入、デモ参加者を凄まじい暴力で痛めつけるなどますます取り締まりは厳しくなる一方だった。これまでの五〇年間にわたる穏やかな要求運動では何も変わらない。主張をアピールするには「言葉より行動を！」と、〝人を傷つけない〟原則の範囲ながら、郵便ポストの放火、電話線の切断、建設中の大臣の別荘の爆破…などへと運動はエスカレートしていった。親友エミリーは、国王に直訴するために潜り込んだダービー場で思いがけぬ事故で命を落とす。夫は去り息子も奪われ、すべてを失ったかに見えたが…。

サフラジェットらの運動が紆余曲折を経て、男女平等による普通選挙として実を結んだのは一九二八年のことだった（日本では第二次世界大戦後の一九四六年に実施）。

『未来を花束にして』

イギリス映画（106分）

監督：サラ・ガヴロン

出演：キャリー・マリガン、ヘレナ・ボナム＝カーター、
メリル・ストリープほか

公開中

© Pathe Productions Limited, Channel Four Television Corporation and The British Film Institute 2015. All rights reserved.